

すなか コマドリの 巣の 中で

きょう 今日、コマドリの お父さんとお母さんが 待ちに 待った 日です。

ここは、コマドリ母さんが 森林公園の 奥に 見つけた、葉が
うっそうとしげる 高い カシの 木の 枝の 上です。新しい
巣を 作るには、もってこいの 場所です。コマドリ父さんは、
コマドリ母さんのために せっせと エサを 運び続けました。
そして 今日、コマドリ母さんが 愛情を 注いで 温めてきた
四つの 小さな 青い 卵が、ついに かえったのです！

コマドリ夫婦は、かえったばかりの ヒナ鳥たちに 名前を
付けました。ビリーと ロビンと チェリーと チャーピーです。



コマドリ夫婦は、家族ができて大喜び。ヒナたちも、お父さんとお母さんが大好きでした。けれども、こまったことに、ヒナたちの間では、お父さんとお母さんが巣に持ち帰ってくれるエサの一番良い部分をだれがもらうかで、しょっちゅうけんかをしていました。それに、自分たちのために一生けん命エサをさがしてきてくれるお父さんとお母さんに、「ありがとう」や「ごちそうさま」などと言うことさえ、すっかりわすれていました。

「お父さん。大きくて太ったミミズを取って来てね。」とビリーがねだりました。

「できるだけことはするよ、ビリー。でもね、ミミズは地面の中にいるから、そう簡単には見つからないんだよ。」

「わたしは、ミミズなんていやよ。ミミズは長くて、によろによろするもの。お母さん、バッタを取って来てね。」とチャーピーが言いました。

「うう！ わたしは、バッタもいや。甘い木の実のほうがいいわ。」チェリーが大きな声で言いました。

わたしは、
ミミズなんていやよ。
ミミズは長くて、
によろによろ
するもの。

わたしは、
あまき
甘い木の実の
ほうがいいわ。



「みんな、何か^{なに} ほしい^{とき} 時は、ちゃんとした たずね^{かた}方があるでしょ。そして、出された^だ 物は^{もの} なんでも、感謝^{かんしゃ}して^た 食べる^た ものよ。」 お母さん鳥が、おなかを すかせた ヒナたちを やさしく さとしました。

けれども、4羽^わの ヒナは 自分^{じぶん}の ほしい^{もの} 物を ねだり^{つづ}続けました。

「ぼくの 大好物^{だいこうぶつ}はねえ。おいしい カブトムシ^いなんだ。」と ロビンも 言いました。

「そうだ、お父さん！ みんなの 大好物^{だいこうぶつ}を 全部^{ぜんぶ} 取^とって来れば、みんな 満足^{まんぞく}するよ！」と ビリーが 言いました。

「まあまあ。お父さん、どう しましょう？」 コマドリ母^{かあ}さんが コマドリ父^{とう}さんに ささやきました。

「では、今度^{こんど}は いっしょに エサさがしに 行^いってみると するか。二羽^{にわ}なら、もっと 何か^{なに} 見つかるかもしれん。」と お父さん^{とう}が 言いました。

まもなく、コマドリ父^{とう}さんが 草^{くさ}の 上^{うえ}を はっている 大きな ミミズ^{みみず}を 見つけました。

それをつかまえると、お母さん^{かあ}と いっしょに 巣^すに もどって来^きました。



「うわあ、見て！ お父さんが ぼくの ミミズを 見つけてきたよ！
朝ごはんを 最初に もらうのは、ぼくだね！」 ビリーが にんまりしました。

お母さんが 言いました。「ビリー。この ミミズは 大きいから、みんなで 分けるのよ。
母さんたちが もっと 食べ物を さがしてくる 間、仲良く 食べていてね。」

けれども、コマドリ夫婦が 朝食の エサを もっと さがしに 巣を はなれたとたん、
ビリーが みんなに 言いました。「これは、ぼくの ミミズだよ！ みんな、
ちがう 物を ほしがってたでしょ。だから、自分の 番が 来るまで、
待たなくちゃ。」

けれども、みんな おなかが すいています。自分の 一番 ほしい 物で
なくても、ミミズも そう 悪くは ないように 思えてきました。

これは、ぼくの
ミミズだよ！



「だけど、もう カブトムシが いなくて、見つからなかったら？ おなか すいたよう！」 ロビンが 心配そうに 言いました。

「わたしも、おなか ペコペコ。少し 食べさせてよ。」と、チェリーも 言いました。

「やだよ。これは ぼくの ミミズだからね。ぼくが 全部 食べるんだ！」

チャーピーとチェリーとロビンは、そう 簡単には あきらめません。ミミズのはしっこを くわえて、引っ張り始めました。反対のはしっこは、ビリーがしっかりとくわえています。兄弟にミミズを取られまいと、ビリーは 巣のふちに 登りました。

「おりて、ビリー！ あぶないわ！」 チェリーが さげびました。

けれども、ビリーは 耳を かしません。ミミズを 力いっぱい引っ張って、その はずみで 巣のふちから 落ちてしまいました。ビリーは どんどん、どんどん、下に 落ちて いきます。そして、やわらかい 草の上に ドサッと 落ちました。



「大変！ だいじょうぶかしら？」 チャーピーが かん高い 声で 言いました。

下を のぞきこみながら、ロビンが 言いました。「だいじょうぶじゃ ないと思うよ。」

一応は 立ち上がったけど、どうやって 巣にもどるんだい？ 羽だって、

まだ 十分に のびて ないし。飛べないものね。」

巣に残った 3羽の ヒナは、だれか 助けてくれないかと、向こうの 方を見ましたが、
目に入ってきたものは、全く 予想外の ものでした。

「あ、あれって、ネ、ネコ？」 チェリーが か細い 声で 言いました。コマドリのお父さんと
お母さんは、ネコは まよい出た ヒナを ねらっているから 気をつけるようにと、言い聞かせていたのです。

「マズい ことになったよ。」と ロビンが 言いました。

地面に 落ちた 小さな ビリーは、こわくて ブルブル ふるえています。ミミズの ことで 大さわぎ
しなければ よかったと、こうかいしました。ですが、もう おそろぎます。巣がある 所は 高過ぎて、
木を よじ登っていく ことも できません。ネコは、どんどん 近付いてきます。

あ、あれって、
ネ、ネコ？



その時^{とき}です。木立^{こたち}の向^むこう側^{がわ}から、おじいさん^きがや^きって来^きました。

「何^{なに}を^みつけたんだい、トビー？」 ネコ^くのそば^くに^く来^くると、おじいさん^きが
言^いいました。そして、小^{ちい}さな^と ビリー^とが、飛^とべないの^{いっしょう}に^{めい}一^{はね}生^{はね}けん命^{はね}羽^{はね}を
パタパタ^みさせているの^みを^みつけました。おじいさん^きは、鳥^{とり}が^{だいす}大^{だい}好^{だい}き^すです。

一^{いち}羽^わの^わすずめ^わも、イエス様^{さま}の^さおゆるし^さな^さし^さには^ち地^ちに^お落^おち^おる^おこ^おとは
ない^{せいしょ}と、聖^{せい}書^{しょ}に^か書^かかれて^よいる^しこ^しを^し読^よんで^し知^しっ^して^しい^しました。¹

「おまえさん^{げん}は、ずいぶん^きと^き元^{げん}気^きそう^きじゃ^きの^きう^き。巢^すは^すこ^すの^す
近^{ちか}くな^いのか^いい？」 そ^いう^い言^いう^いと、おじいさん^きは^きハンカチ^きを^き
取^とり^だ出^だして^としゃ^{ちい}が^{ちい}み^{ちい}、小^{ちい}さな^{ちい} ビリー^{ちい}を^{ちい}拾^{ひろ}い^あ上^あげ^あま^あした。す^あると、
小^{ちい}さ^{ちい}く^{ちい} さ^{ちい}え^{ちい}ず^{ちい}る^{ちい} 声^{こえ}が^き聞^きこ^きえ^きま^きした。チャーピー^{しんぱい}が^{しんぱい}ビリー^{しんぱい}の^{しんぱい}こ^{しんぱい}と^{しんぱい}を、
たい^{しんぱい}そ^{しんぱい}う^{しんぱい} 心^{しんぱい}配^{しんぱい}し^{しんぱい}て^{しんぱい} 鳴^ない^なて^ないた^なの^なです。

「ほ^いら^いよ^い、お^いチ^いビ^いさん^い。」 そ^いう^い言^いう^いと、おじいさん^きは^きビリー^きを^き
そ^すっ^すと^す 巢^すに^すも^すど^すし^すま^すした。ビリー^いが^いだい^いじ^いょう^いぶ^いそ^いう^いな^いの^いを^い
見^みと^みど^みけ^みると、おじいさん^きは^きまた^き 散^{さん}歩^ぽを^{さん} 続^{つづ}け^{つづ}ま^{つづ}した。

¹ マタイによる福音書10:29



きょうだい ふたた わる い
兄弟たちと再びいっしょになれたビリーは、きまり悪そうに言いました。

「ミミズのことで大さわぎをするなんて、ぼくがバカだったよ。」

「巣にもどって来て、ほんとに良かった。」

チャーピーとチェリーが、口をそろえて言いました。

「ぼく、みんなに もっと やさしくなれるよう、
がんばるよ。」

「ぼくたちもね。」 ロビンも言いました。

ヒナたちのうれしいことに、ふと おいしいそうな
ミミズがまだあります。みんなはそれを なかよ わけて
食べました。コマドリのお父さんとお母さんがもどって
来ると、子どもたちが みんな ぎょうぎよく、おたがいどうし
おも思っているのを見て、たいそう喜びました。ヒナたちは、
お父さんとお母さんが 持って帰ってくれた
おいしい工サを見て、心から「ありがとう！」
と言うのも、わすれませんでした。

ありがとう!